

『ヴィクトリア朝文化研究』創刊に際して

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
会長 松村 昌家

ヴィクトリア朝文化研究に対する関心が、こんなにも広がるとは予想していなかった。実をいうと、少人数のこぢんまりした学会活動ができれば、それでよいと思っていたのが、会員 300 名近くを擁する大所帯の学会となった。そして学会誌として『ヴィクトリア朝文化研究』が創刊される運びとなった。

まず順調な船出だといえようが、これから先の長い航海を続けて行くためには、よほどの勇気と忍耐と創意、そして何にもまして協同態勢が必要となるであろう。

そこで思い出すのは、ヴィクトリア朝復活の兆しが見え始めた 1940 年代に、いち早くも学際的研究の方向が指し示されていたということである。たとえば、画期的な仕事をやりかけて惜しくも世を去った若手学者、ハンフリー・ハウスは、ヴィクトリア朝文化の創造を担ったいかなる思想家、文学者、芸術家を研究するにしても、全体的な生活と全体的な環境との関連性を重視すべきであることを力説した。つまり異分野との関連性を無視した特定領域の研究は、ともすれば“hopeless misunderstanding”に陥りやすいことを、彼は戒めているのである。

それ以後イギリスはもとより、アメリカやオーストラリアにおいてもヴィクトリア朝研究が目ざましい勢いで進められたことについては、大方がご存じのとおりだ。ヴィクトリア朝文化の総合的研究を目指して設立された研究機関も少なくない。このような趨勢の中で、日本でも少なくとも個別的には、世界の水準に並び得るような業績が生まれてきたことも事実である。では、私たちが研究集団として独自の存在感を発揮できるようになるためには、どうすればよいのか。基本的には、もちろんそれぞれの専門領域において、しっかりした独自のベースを築くことが肝要である。しかし、閉鎖的な考え方や独善は避けるべきである。歴史、文学、芸術、経済、思想等、あらゆる分野におけるそれぞれの研究を尊重しつつ、総合的・解放的に議論を交わし、お互いに資するところをもち、益するところを得て研究の水準を高めることを目指すべきであろう。

各自の専門領域を個体とするならば、「文化」は総体ということになる。従ってたとえば、文学や歴史は、それぞれが文化の一部分なのだ。もちろん文学と文化とは対立項ではない。厳しい批判精神によりながらも、排他・対立ではなく交流と融合を基調として、本学会は、あらゆる学問領域に開かれているのである。『ヴィクトリア朝文化研究』が、決して単純でないヴィクトリア朝文化の諸相を論じ合う場として、学界に貢献できるようになることを期待したい。